

京都府の埋蔵文化財・調査研究 センター・この10年

中谷雅治

1 はじめに

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、1981年3月25日に設立の認可が下り、同年4月1日から業務を開始した。それから早くも10年の歳月が過ぎたことになる。この10年の間、全国においては非常に多くの遺跡が発見され、発掘調査されてきた。それらをここに一々列挙するつもりはないが、京都府内に限ってみても、やはりこの10年の間には過去に例を見ないほど多くの重要遺跡・遺物の発見が相次いだと言っていることができる。

例えば、それらの内でも特に重要なもの、あるいは話題となったもの10例を、北の地域から順に拾ってみると、保存状態がきわめて良好で、刻まれた繊細な模様が美しい湯舟坂2号墳の金銅装の環頭大刀(久美浜町、1981年)、日本で最古級の製鉄遺跡として注目されている遠所遺跡群の調査(弥栄町、1989・90年)、弥生時代前期の大規模な環濠集落である扇谷遺跡の調査(峰山町、1981年)、弥生時代中期の貼り石墓を検出した志高遺跡の調査(舞鶴市、1988年、縄文前期の土器群が多量に発見されたことでも有名)、広峯15号墳から出土した「景初四年銘鏡」(福知山市、1986年)、京都府内で最大級の円墳である私市円山古墳の発見(綾部市、1988年)、平安宮内では大極殿に並ぶ中心的建物である豊楽殿基壇の調査(京都市、1987年)、古墳の発生期に位置付けられる芝ヶ原古墳の調査(城陽市、1986年)、平城京還都時の修復工事に用いられた瓦の生産基地である上人ヶ平遺跡の調査(木津町、1989年)、恭仁宮の南限並びに朝堂院の範囲が確定された諸調査(加茂町、1988～1990年)である。

以上の他にも考古学の研究に貢献する貴重な調査成果は少なくないが、小稿では京都府埋蔵文化財調査研究センターのあゆみを振り返るなかで、京都府内の主要な発掘調査成果・出来事等を紹介することとしたい。

2 センター設立の背景

当センターは、1981年(昭和56年)4月1日から業務を開始したが、これに先立って、3月13日に設立発起人会が開催され、同月25日に京都府教育委員会によって設立が許可され

た。当時、京都府内の国・京都府等の公共事業に伴う遺跡の発掘調査には、京都府教育教育委員会に所属する嘱託調査員に加えて、京都府教育庁文化財保護課の技術職員が主として当たってきた。それがこの時点で、国・京都府、それに国・府等の設立した公社・公団等の事業に先立つ遺跡の発掘調査は、原則として当センターが担当することとなり、京都府教育庁文化財保護課は、恭仁宮における一連の発掘調査のように、やがて来るであろう開発事業に先駆けて、遺跡の範囲を追う調査や、遺跡の存在を確定することを目的とした試掘調査を主として担当することとなった。

ちなみに、市・町等の公共事業や一般の企業の実施する開発事業等に伴う遺跡の発掘調査は、原則として、該当する市町村の教育委員会が、また、京都市内においては財団法人京都市埋蔵文化財研究所等がそれぞれ分担することなど、ここに到ってそれぞれの機関の間に一定の役割分担が確立されたことになる。

ところで、この時期は既に全国的に各種の開発事業が頻繁に行われるようになっていた。そして1975年に文化財保護法が改正され、埋蔵文化財の保護に関わって、文化庁と開発事業者との間で交わされる一定の手続きが整理され、それが工事関係者等に定着してきたこの頃は、文化庁長官あてに提出された「土木工事等による発掘届」等(文化財保護法第57条の2等)の数が急増の一途をたどっていた。第1表は文化庁の発表した数字であるが、

第1表 全国の「土木工事等による発掘届」等の年度別推移表

年 度	届出等数	前年度比
1971	1,275	
1972	1,715	1.35
1973	2,066	1.20
1974	2,309	1.12
1975	2,825	1.22
1976	3,886	1.38
1977	5,685	1.46
1978	7,083	1.25
1979	8,919	1.26
1980	9,417	1.06
1981	11,773	1.25
1982	13,638	1.16
1983	14,540	1.10
1985	18,076	1.13
1986	21,755	1.20

第2表 京都府の「土木工事等による発掘届」等の年別推移表

年	届出等数	前年比
1971	25	
1972	82	3.28
1973	265	3.23
1974	238	0.90
1975	337	1.42
1976	588	1.74
1977	747	1.27
1978	1,049	1.40
1979	1,317	1.26
1980	1,478	1.1
1981	1,589	1.08
1982	1,850	1.16
1984	1,917	1.02
1985	2,189	1.14
1986	1,742	0.80

1975年度以降は急激にその数が増加する傾向にあり、1975年から1984年の僅か10年の間に約5.7倍に増えている。そして京都府内でも第2表のとおり、やはり1986年の数は1975年のその5.7倍と、先の全国の場合と全く一致して、京都府内の開発事業と遺跡との関係は、全国の傾向とほぼ同じであると言えることができる。

こうした状況下にあつて、京都府教育委員会では、当センターが発足する2年前の1979年度からは、府内でそれぞれの立場で発掘調査等に従事していた、いわばフリーの調査員を嘱託調査員として採用し、彼らが主として国・京都府などの公共事業に伴う遺跡の発掘調査を担当するようになった。当時の京都府内では、建設省による国道9号バイパス、日本道路公団による近畿自動車道舞鶴線、国鉄による福知山線複線電化事業に伴う電車基地の建設等々、大規模な公共事業が目白押しの状態であつて、それらに付随して、遺跡の発掘調査体制の充実の必要性もますます増大してきた段階にあつた。

こうした世情を背景に、当センターは先の嘱託調査員の大半を調査員として採用し、1981年4月に新たな第一歩を踏み出した。

ちなみに、この年までに設立された全国のこの種の機関は、財団法人・公立ともに合計21機関を数えた。この内、府・県レベルの機関は、北は北海道から西は広島県までの14機関であつた。そして残りの7機関は市・郡等の設置によるものであるが、その中には京都市が含まれていて、財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、当時、全国的に見ても先進的な機関として注目されていたこともあつて、当センターの設立に際しては、京都市のこの研究所が各点において参考とされた。

さらに設立に当たっては、長岡京跡のように複数の市町にまたがる広域な遺跡に限って、当該市町の教育委員会が発掘調査を分担するのではなく、「新設のセンターがこれを一手に担当すべきである」とか、「単に遺跡の発掘調査だけをする機関ではなく、研究機能を充実させた組織にするべき」等々の意見が少なからず寄せられたりした。

こうした諸事情、諸意見等を参考にしながら、当センターの組織・機能等々が決定されたが、これらの内、特に理事の構成に配意が見られた。全国的に見てこの種の機関は、公立、財団法人の別なく、地方公共団体が設立するために、理事会のメンバーの過半数が行政関係者で占められ、いわゆる学識経験者の占める割合は約3分の1程度の場合が多い。ところが当センターでは、約3分の2が学者・研究者で理事会を構成した。さらに理事長が学者であることも他の多くの機関と異なる点である。このことは現在においても変わっていない。

3 あゆみ

当センターの10年のあゆみを、縄文時代の時期区分を真似て表現するとすれば、発足時から1984年4月までの間、事務所が立命館大学の旧広小路学舎の一部に間借りしていた時期があったが、主にこの頃を「草創期」、やがて庁舎が新しく建設され、そして今の場所(向日市)に移り、組織が今の状態に改正・整備されるまでの時期を「早期」、さらにそれ以降から10周年を迎えた現在までを「前期」と言うことにする。したがって、明年以降はさしあたって「中期」と言うことになるが、それより先は新たに「盛期」「最盛期」「最々…期」となり、縄文時代の区分とは大きくかけ離れて行くことを前提としている。

なお、当センターが発足する以前の嘱託調査員制度の時期は、とりわけ「先土器時代」と言うことになるのか。

(1) 草創期

先にも触れたとおり、この時期はセンターが設立されたと言っても、専用の庁舎は未だなく、したがって、新庁舎が建設されるまでの仮庁舎として、立命館大学が衣笠学舎に移転したあと、京都府の所有するところとなった旧広小路学舎の一部が、それに当てられた時期があった。厳密に言うならば、1982年4月から1984年4月までの時期である。

特に初年の1981年は、全国規模で話題となった貴重な遺跡・遺物の発見が、京都府内で相次いだ。一つは、久美浜町の湯舟坂2号墳から出土した環頭大刀の発見で、この大刀の保存状態が極めて良好で、「親子双龍式」環頭の柄頭から鞘尻までの全部分に施された鍍金の状態が、ほぼそのままの輝きを保っていたために、学問的価値に加えて、そのことがマスコミに大きく取り上げられた(久美浜町教育委員会調査)。またそれに続いて、峰山町においては、以前から同町教育委員会によって調査されていた扇谷遺跡で確認された大規模な環濠が、「倭国大乱」の時期のものであったこと、およびこれの内部から発見された鉄・ガラス等々の遺物が、当時としては最先端技術のものであったことなどから、その重要性が取り沙汰され、これの保存運動ともからんで、やはりマスコミ等が大きく取り上げるところとなった。

この年の当センターは、「先土器時代」つまり嘱託調査員時代から実施してきた日本道路公団の「近畿自動車道舞鶴線」ならびに国道9号バイパス建設に伴う諸遺跡の調査を引き継ぎ、さらに国鉄による福知山電車基地建設のための豊富谷遺跡群の調査をはじめ、合計38ヶ所の遺跡等の調査を実施した。

福知山電車基地に伴う調査では、前年の調査に引き続いて、狭小な丘陵尾根の自然地形を利用して、尾根に直交する溝等の簡単な施設を施しただけで、盛り土もない「方形台状

墓」様の古墳を数多く調査した(谷尾谷古墳群、セイゴ古墳群、狸谷古墳群等)。これらは庄内式～布留式土器の時代のものであるが、現在ではこの種の古墳は、京都府内、特に北部地域においては珍しいものではないものの、当時としては盛り土のない古墳の調査は一般的ではなかった。たまたまこれに期間的に平行して行われた丹後町の大山墳墓群の発掘調査(丹後町教育委員会)においても、この種の遺跡が確認・調査された。そのためこれ以降は、北部地域の各所で積極的にこの種の古墳の分布調査が実施され、発掘調査されるようになったが、こうした意味で、当センターの豊富谷遺跡群の発掘調査は、大山墳墓群の調査とともに大きな意義を有した。

また、国道9号バイパスの建設に伴って、亀岡市の篠窯跡群の調査が以前から京都府教育委員会によって実施されてきたが、センターの発足とともにこの調査も引き継ぐこととなった。この窯群の製品については、平安京等に供給されていたことから、多くの研究者によって調査の成果が注目されていたが、この年の調査では、西長尾地区で一種のロストルを備えた楕円形の窯跡を発見した(西長尾5号窯)。これは11世紀初頭の窯の1型式であることが出土遺物から明らかとなったが、中世の土器窯への中間的型式が理解されたことで重要な調査であったと言える。

さらにこの年は、京都府立南八幡高校の新設に先立って当センターが実施した狐谷横穴群の調査結果が、世間の注目を浴びた。高校用地の選定の時点では、この横穴群の存在は知られていなかったが、付近に大規模な横穴群が散在している地域の画であった関係から、事前に試掘調査を実施し、その結果、存在が知られるようになったものである。当地は孟宗竹の藪のため「土入れ」作業によって地形が大きく変革されていたことに加えて、横穴自体も構築後あまり時間が経過しない時点で埋没したことが、発見が遅れた大きな要因であった。発掘調査の結果、当敷地内に限って見れば6世紀末～7世紀初頭に築かれた7基の横穴の存在を確認した。これらは、総合的な判断のもとでは、20数基の規模を有する横穴群の一部であることが判明した。ところがこれらのいずれもが非常に遺存状態が良好であったために、これの保存についての世論が急激に盛り上がり、結果的に京都府教育委員会の英断の下で、7基全部の保存が図られ、後に京都府の史跡に指定され、現在に到っている。1981年は、まさに京都府にあっては、考古学・古代史研究、さらには埋蔵文化財保護行政にとって非常に重要な、そして意味のある年であった。

翌1982年は、京都府の文化財行政にとって永年の懸案事項であった文化財保護条例が制定され、施行された年である。この条例は、全国の保護条例としては最も新しいもので、当時としては、全国には例を見ない「登録制」が導入されるなど、ユニークな条例として注目された。そしてこの年度には、この条例に基づく初めての史跡の指定が行われた。こ

の時の京都府指定史跡6件の中に、先の湯舟坂2号墳ならびに狐谷横穴群が含まれた。またこの時は、前年に京都大学が調査した京北町の周山瓦窯跡が、以前から知られていた周山麿寺跡とともに史跡に指定されている。

この年の発掘調査の中で最も注目されたのが、宇治市教育委員会の実施した隼上り瓦窯跡群の調査である。この遺跡は、大規模な住宅地造成工事に先立つ分布調査によってその存在が知られたが、この年の調査では、保存状態の良い3基の窯跡とそれらを囲む断面V字状の深い溝跡が確認された。窯を囲む溝の存在は、その後の1983年に京都市北区蟹ヶ坂窯跡群においても確認されるなど、今では敢えて取り沙汰されるまでのものではなく、当時としては画期的な発見であったとすることができる。さらにこの窯で焼かれた瓦が、遠く大和の豊浦寺に供給されていたことが明らかとなったが、生産地と供給先が明確な例として貴重であるとともに、直線距離にして約50kmもある豊浦寺に供給されていた事実の発見は、やはり関係者の注目するところであった。その後、1986年にこの遺跡は国の史跡に指定された。

長岡宮の調査は、今や軌道に乗り、宮内の殿舎配置、特に朝堂院の殿舎の配置・規模等は図上で復原できるまでになっているが、この年に実施された朝堂院西四堂の調査(向日市教育委員会)で、それまでの朝堂院の建物復原に大きな間違いのあることが判明した。長岡宮の朝堂院は、他の宮のそれに比べて極端に狭く、朝堂そのものの配置も他と異なるものであったが、建物個々の規模はいずれも桁行9間、梁間4間と、他と同じように復原・想定されていた。ところが、朝堂院域の最南に位置する4堂目の建物(東西棟)に限っては桁行が11間と、さらに長い建物であったことが明らかとなった。他の宮の朝堂院に比較して、棟数が少ない分、一部の建物の規模が大きく作られていたことが分かったことは、長岡宮の研究にとって非常に大きな成果であった。

国の史跡である丹波国分寺の本格的な発掘調査が亀岡市教育委員会によって始められたのも、この年からである。初年度のこの年には、推定金堂域が調査され、調査前から推定されていた部分から、非常に保存状況の良い乱石積みの基壇が確認された。そしてこれの南辺中央には、奥行1.8mの石階部分の跡が発見されたりして、今後の調査に基準となる重要な遺構が調査された。これ以降の調査は続行され、大きな成果がもたらされ、近年の内に、こうした調査成果をもとにして、寺域全域にわたって公有化、整備されようとしている。

さらにこの年には、木津町の相楽山で銅鐸が、また向日市鶏冠井遺跡からは銅鐸の鋳型の一部が発見されるとともに、京北町の愛宕山古墳では、後の1986年に京都府の有形文化財(考古資料)に指定された銅鏡や勾玉、その他玉類などが出土するなど、総体的に見てこ

の年は、市・町の調査による貴重な発見が相次いだと言える。

一方、この年の当センターの発掘調査は、やはり近畿自動車道舞鶴線、国道9号バイパスに伴う調査が主流を占め、前年とほぼ同数の35件を数えたものの、全国的規模で注目あるいは話題となった調査結果は、残念ながら見当たらない。とは言うものの個々については貴重な成果であったことは言うまでもない。

なお、この年の7月1日付けで、新しく財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが発足した。京都府内でこの種の機関は、京都府・京都市に続いて3番目ということになる。

1983年度は、当センターでは32か所の発掘調査を実施した。この年度では、醍醐寺三宝院の宝篋印塔基壇の発掘調査がユニークなものとして挙げるができる。この宝篋印塔は国の重要文化財に指定されているが、京都府教育委員会がこれを解体修理するのを機会に当センターが調査を実施したものである。この塔は、醍醐寺第6代座主賢俊の墓と言われているもので、三重の基壇をもつ特殊なものである。調査の結果、これは一人のための墓であったのではなく、基壇内だけでおおむね12世紀末～14世紀の15基の埋葬施設が確認された。これらは常滑・備前・信楽焼の大甕や壺を蔵骨器とし、内部の木櫃には火葬骨が納められていた。調査後、これは元の姿に復原されたが、塔の下には復原された大甕や壺が再び埋納された。宝篋印塔の下部構造を知る上で非常に参考となるものである。

この年、綾部市教育委員会は聖塚古墳・菖蒲塚古墳(いずれも方墳)の墳丘裾部および周濠部分の確認調査を実施した。両古墳は夫婦塚として地元だけでなく研究者の間でも有名な古墳であるが、付近の水田がほ場整備されるのを機会に調査された。この内、聖塚古墳については、かつて墳丘頂部から鉄製品等が出土したことが知られていただけで、有名な古墳のわりには詳しいことが分かっていなかったが、この調査によって再び注目された。調査の結果、聖塚古墳・菖蒲塚古墳ともに墳丘裾部の葺石の遺存状態が比較的良かったこともあって、両者ともに南側に造り出しを有していることが判明したが、菖蒲塚古墳の造り出し部は、片方だけが2段になった特異な形態であることが確認された。またそれぞれの規模等についても多くの知見が得られたが、今ではこの調査によってその存在、規模等が明らかとなった周濠部の用地が、綾部市によって買収されたこともあって、今や国による両古墳の史跡指定が待たれている状況である。なお、この両墳は丹波地域にあって、大和政権色が入る前の在地の豪族の墓と位置付けられているもので、後に私市円山古墳が発見され、調査された際には、大和と丹波の関係を論じる上で再び注目された。

この年も長岡宮内の調査(向日市教育委員会)で大きな成果があった。大極殿の真北の一面から礎石の建物跡が発見された。これはいわゆる「べた柱」の建物で、一般的には倉庫と考えられるものであって、この位置が、平安宮からすれば大蔵省に当たるため、長岡宮

についてもこの建物こそが大蔵であろうとされた。

以上に述べたように、当センターの「草創期」は、センター内外を問わず、10年の中でも特に重要な発見・事柄が相次いだ時期であったとすることができる。誕生したばかりのセンターは、この間、内外の保存運動や、重要な遺跡・遺物の発見を体験し、組織的にも徐々に力を蓄えて、確かな第1歩を歩みだした時期であったとすることができる。

(2) 早期

1984年4月、当センターは、かねてから京都府教育委員会が向日市寺戸町に建設していた新庁舎に移った。組織そのものも、発足当初は事務局長・総務課・調査課職員を含めて総勢20名であったのが、この年の4月には33名を数えた。近畿自動車道舞鶴線・国道9号バイパス建設等の大型事業に加えて、京滋バイパス・京奈和バイパスの建設(日本道路公団)、由良川改修工事(建設省)、丹後国営農地開発事業(農林水産省)、それに1988年に実施される「京都国体」に向けての道路整備事業等がますます軌道に乗り、それらに伴う遺跡の発掘調査の急増に対応するために大幅な組織の充実が図られた結果である。

そしてこれより3年後の1987年になって、ますます拡大する組織を再編する意味もあって、2課制が3課6係制となるわけであるが、この3年間で「草創期」とともに当センターの基盤固めの時期であった。

1984年度は、京都府教育委員会が「京都府遺跡地図」の改訂版の刊行に着手した年である。この種の地図は、1972年に府内全域を対象としたものが、やはり京都府教育委員会によって刊行され、また1975年に文化庁により「全国遺跡地図(京都府)」が刊行されていたが、その後新たに発見された遺跡が急増したこと、およびそれまでの地図の縮尺が大きく、細部にわたっての確認に不便を来したこともあって、にわかには新しい遺跡地図の刊行が5ヶ年計画で持ち上がり、この年にスタートしたのであった。そしてこの年度の末には、南山城地域分が刊行された。

この年度の当センターは、合計30か所の発掘調査を実施したが、件数的には前の年の数を下まわっていると言うものの、各調査それぞれの規模が大きくなっているために、全体としては事業規模が拡大したことになる。この年もやはり近畿自動車道舞鶴線・国道9号バイパス・京滋バイパスの建設に伴う調査が主体を占めたものの、他に由良川改修、宮福鉄道建設や外環状線等の府道の整備・建設工事に伴う調査も年を追うごとに増えてきた。

この年、山城町教育委員会は、国史跡の高麗寺跡の調査に着手した。この遺跡については、金堂・講堂・塔など、主要な堂宇の配置等、既に明らかとなっていることは少なくなかったが、寺域を確定するまでには至っていなかったために、こうした中心建物の細部を検討する必要もあって、この年は主として講堂跡の調査が行われた。過去の調査で明らか

になっていたとはいえ、瓦積み基壇の遺存状況の良さには、改めて驚かされるものがあった。これ以降、1988年度まで調査は続けられ、大きな成果が収められた。

城陽市の芝ヶ原10・11号墳は、かねてより何れも墳丘の残り方が良好で、しかも大型の円墳として関係者の間では注目されていたが、この年の10月に突如、重機によって墳丘が削平されるという事態が発生した。これに至るまでの間、城陽市教育委員会はもとより、京都府教育委員会等の関係者は、極力こうした事態を避けるための交渉を、地権者との間で何回となく繰り返したものの、結果的には最悪の事態を招くこととなった。この時点で、多くの研究者をはじめ地元の人たち、さらにはマスコミ等が行政関係者や地権者に対して、これを保存すること、ならびに、精密な発掘調査を実施するべきと要望する中で、当センターと京都府教育委員会の応援を受ける形で城陽市教育委員会が緊急に調査を実施した。その結果、両墳ともに造り出しが設けられていたことが判明したり、11号墳から三角縁神獸鏡等が発見されるなど、その成り行きは多くの注目を集めた。残念なことに、この両古墳は調査完了後、削平され、宅地として造成された。

さらに、京都市北区西賀茂の蟹ヶ坂窯跡群の調査(京都市埋蔵文化財研究所)によって、非常に残りの良い瓦窯跡が発見された。ここでは窯跡そのものが非常に良好な状態で遺存していただけでなく、窯群を取り囲む水切り溝跡が大変良好な状態で検出されたりして、この調査も、関係者の注目を大いに集めたものであった。

向日市の物集女車塚古墳(前方後円墳)の横穴式石室が調査されたのも、この年度であった。内部には組合式家形石棺が安置されていたが、当時、奈良県藤ノ木古墳の石棺が注目されていた関係で、この家形石棺の発見も世間の目を大きく惹いた。

翌1985年は、当センターの設立5周年に当たる。そしてこれを記念して、関係者全員が執筆することを基本に創立五周年記念誌『京都府埋蔵文化財論集 第1集』の刊行を目指すこととなった。

この年、当センターでは48ヶ所の調査を実施した。この年からは、日本住宅都市整備公団が中心となって進める「文化学術研究都市」造成地の内の「木津南地区」において、遺跡の試掘調査が本格的に進められることとなった。これまでも、いわゆる「学研都市」の「精華地区」・「田辺地区」等においても、この種の試掘調査を断続的に実施してきたが、顕著な発見や成果がなかったために、そう目立ったものではなかったが、この「木津南地区」においては、平城宮・京に関係する瓦窯跡等の存在が、既に知られているところから、今後、大規模な調査が必要となる地域であり、この年の調査は、その序章とも言えるものであった。

この年度は、市・町教育委員会等の実施した発掘調査の成果に見るべきものが多かった。

それらはいずれも、際立って世間の注目を集めたというわけではないが、関係者の中で注目された調査が相次いだ。一つは大宮町の大田鼻横穴群の発見であり、また、精華町畑ノ前遺跡の調査、さらに、京都市栗栖野瓦窯跡、八幡市平野山瓦窯跡の調査がそれらである。この内、大田鼻横穴群の調査は、近畿農政局の実施する農地開発事業に伴って実施されたものであるが、これの存在についてはこの時まで明らかでなかった。これの立地する低丘陵の尾根に存在した墳墓群(帯城墳墓群)の調査の際に行われたささやかな確認行為が、結果としてこの遺跡の発見に結び付いた。調査担当者の問題意識の持ち方によって大きく変わりうることであるだけに、当時としては関係者に大きな刺激となった。遺跡は約30基ほどの6～8世紀の横穴墓群で、「厨」等と書かれた墨書土器や多量の土師器が副葬されていたことが目立った。そしてこれほどの規模の横穴の存在が知られたのは、京都府内では始めてであるし、調査されたのも当然のことながら始めてである。

畑ノ前遺跡についても、以前から知られていたわけではなく、この調査に先立つ試掘調査によって発見された遺跡の一つである。この遺跡は、木津川を見下ろす低い台地上に位置している奈良時代の豪族の居館跡に想定されたが、面的に広範囲に調査されたこともあって、その様子が理解され易い上に、巨木をくり抜いた井筒(直径1.14m、高さ3.54m)が発見されたことも人目を集めた。

平野山瓦跡、栗栖野瓦窯跡については、前者が大阪の四天王寺に使用された瓦を焼いた窯として、また後者は平安宮に供給された瓦を焼いた窯として良く知られている遺跡であるが、いずれも宅地開発に関連して発掘調査が行われた。特に後者においては、9基調査された窯の内、1基の登窯からは焼成時そのままの状態为数多くの瓦が発見され、関係者を驚かせたものであった。

1986年度は、京都府内の考古学的調査成果が全国的に最も注目された年度であった。その原因の一つが福知山市広峯15号墳から「景初四年銘鏡」が発見されたことであり、もう一つが、城陽市の芝ヶ原12号墳の調査成果であった。前者は、「景初」という記年銘鏡として貴重だけでなく、実在しないとされる中国魏の「景初四年」が銘されていたことから、「三角縁神獣鏡論」や「邪馬台国論争」に改めて灯を付けただけでなく、東アジア史の研究にさえ大きな波紋を投げ掛ける結果となり、後者は、弥生時代から古墳時代にかけての墓制の在り方に重要な資料を提供したことで、やはり古墳の発生期を研究する人たちにとっては、極めて貴重な調査成果であった。

さらにこの年度、立命館大学によって加悦町の鴨谷東1号墳が発掘調査されたが、ここにおいては、葺石が見事な状態で検出されただけでなく、周囲に巡らされた円筒埴輪列の様相も見事で、基底部の埴輪列にいたっては、樹立時の状態そのままの形で検出され、人

々の目を釘付けにしたものであった。

この年度の当センターは、41か所で発掘調査を実施した。この内で特に注目されたのが、由良川改修工事に伴って数年前から行っている舞鶴市の志高遺跡の調査成果である。ここでは現地表から約3.5m下に弥生時代中期の貼り石墓が発見された。この種の遺構は、かつて弥栄町の奈具岡遺跡で発見されたが、これが部分的でしかなかったこともあって、当時、これが貼り石墓の一部であることに気が付かなかったものが、この志高遺跡での発見で、同種の遺構であることが分かった。さらにこの種の貼り石墓は、その後、野田川町においても発見されたが(寺岡遺跡、1987年)、やはりこの志高遺跡の遺構が参考となって確認された経過がある。さらにこの遺跡では、翌1987年には、縄文時代早期の土器と多量の前期の土器群が発見されるなど、京都の弥生文化、縄文土器の研究に大きな意味のある遺跡として、その後大いに知られるようになった。

さらにこの年に実施した京都市の尊勝寺跡の調査では、過去の調査・研究の中で杉山信三氏が推定された位置に一致して観音堂跡が検出されたことも、印象に残るものであった。

なお、この年度、待望の当センター創立5周年記念誌『京都府埋蔵文化財論集 第1集』が刊行された。この論文集は、当センターの全調査員はもちろんのこと、元調査員等が全員執筆することを原則にしたものである。さらにこのような論集の刊行は、全国の同種の機関にとっては、極めて異例で、したがって大いに注目されたもので、これ以降、このことが刺激となって、幾つかの機関がこの種の論文集を刊行した。

(3) 前期

1987年度、京都府埋蔵文化財調査研究センターは組織を大幅に改造した。発足当初、総員20名であったものが、この年の3月には38名に増員されていた。これに加えて、事業量も当初の約1.8倍にも膨れ上がっていたために、効率良い調査・研究体制、効率良い組織運営を目指して機構の一部が改正されたのであった。現在の体制の3課6係制になったのはこの時である。これから設立10周年を迎える1990年までがセンターの「前期」である。

また、この年度から、受託先別から見た発掘調査経費総額の順位に変化が認められた。つまりこの年度までは、当センターでは、道路公団等の国の公社・公団からの発掘調査の受託額が最も多く、次いで京都府、そして建設省などの国であったが、この年度からは、京都府と国との間で逆転現象が起こった。このことは、翌1988年に実施される「京都国体」の関連事業が、一段落したことの証で、国体の準備が着々と進んでいることを意味するものであった。この年度以降、公社・公団、国、京都府、その他、の順となっている。

この年度、当センターは綾部市の平山城館跡の調査で、広範囲にわたって、巨大な畝状の堅堀群の跡を検出した。中世の山城にこの種の堅堀が設けられていることは、研究者の

間で知られていたが、この調査のように、これだけの規模・面積で検出された例は、過去にほとんどなく、研究者から大いに注目されたものであった。今後の山城の調査においては、これを参考にして調査対象地が選定されるであろうことを考えれば、平山城館跡の調査は重要であったとすることができる。さらにこの年度では、やはり綾部市私市(きさいち)の近畿自動車道舞鶴線の予定路線上で、中世の小さな城跡ではないかと考えられていた所が、実は、大規模な古墳であったことが、試掘調査の結果明らかとなった(私市円山古墳)。これの本格的な調査は、次年度に送られたが、これは葺石・埴輪が施された、府内で最大級の円墳であった。さらに同じ綾部市において、新たに横穴群を発見し、これを調査した。横穴群については、京都府内においては決して珍しいものではなく、それらも南山城地方と丹後地方に偏って分布している事実さえ知られていた。したがって、この地方に横穴が存在した事実が知られたことで重要と言えるが、これを発見したきっかけは、工業団地造成に先駆けて実施した栗ヶ丘古墳群の調査の際に、調査担当者が見つけた僅かの可能性を執拗に追及したことの結果であった。これは調査担当者の土への執念と問題意識の持ち方の重要性を再認識させてくれたことで、先の大田鼻横穴群の発見・調査とともに、多くの人達の心に残った調査であった。

この年度、財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、平安宮と京跡に関わる重要な調査を実施した。一つは、平安宮豊楽殿跡の調査であり、他は、平安京右京六条一坊五町跡の調査である。平安宮豊楽殿については、過去の付近の調査で、関連する遺構の存在は知られていたというものの、この時の調査では、凝灰岩の基壇そのものが検出され、その遺存状況の良さが話題となった。このことは、京都の市街地においてもまだまだた保存状態の良い平安京・宮に関わる遺構があることを立証したことにもなった。事実、後者の調査では平安時代前期(9世紀)の貴族の邸宅跡が、これまた良好な状態で発見された。

京都府教育委員会が恭仁宮跡の調査を始めて20年近くが経過したが、この間、朝堂院に関わる遺構の検出については、非常に遅れていた。その最大の理由は、この宮の場合は、朝堂院の範囲・規模や建物・築地等が他の宮の場合と異なっていることであるが、この年の調査では、これの南限の塀跡とともに正面の門跡が確認された。このことは、恭仁宮の規模、南限を知るためにも極めて重要なことで、やはり恭仁宮跡の調査研究史上に特記されるべきものである。

この年、前年度に発見された「景初四年銘鏡」を広く一般市民に紹介するためもあって、当センター、京都府教育委員会ならびに府内の主要な資料館が中心となって巡回展示「鏡と古墳」展を開催した。これには、先の鏡とともに戦後の府内において新たに発見された銅鏡のほとんどすべてを展示するのが目的であって、多くの人達の間で好評を博した。そ

して同時に当センターでは、やはりこの「景初四年銘鏡」の発見を記念に特別講演会「広峯古墳と景初四年銘鏡」を開催した。

翌1988年度は、先の綾部市の私市円山古墳を本格的に調査した。墳頂部には3基の埋葬施設が設けられていたが、その内の2基は、いずれも粘土で覆われた組合式の木棺内に甲冑が副葬されていて、両者非常に似たものであった。さらに、両者の埋葬時期もともに5世紀の中頃前後と、これまたほとんど差がない。この時期、この地方の古墳のほとんどが方墳であるところから、円墳であること自体が貴重であるだけでなく、造り出し部を含めて、全長81mの規模を有していることから、これの被葬者が大和政権に関わった人であったとすれば、当地方の統治の有り方を考える上に貴重な問題提起をしたこととなる。

なお、この古墳は、当初、近畿自動車道舞鶴線によって壊される計画にあったが、道路公団はじめ、関係者の英断により、工法を変更(トンネル)して永久に保存されることが決まり、近い将来綾部市によって整備が図られ、一般に公開されようとしていることは、甚だ喜ばしいこととして、ここに特筆しておきたい。

また、かねてから当センターが調査していた木津町の上人ヶ平遺跡の一面において、埴輪窯群を検出した。検出した窯跡は1基にすぎないが、他に2基が存在する事実も同時に確認された。もちろん京都府内では初めての発見である。

1989年度は当センターの調査の内でも、上人ヶ平遺跡(木津町)で重要な成果を収めた。この遺跡については上にも少し触れたとおり、数年前から試掘し、発掘調査を継続的に実施してきたが、ここが平城京還都の際の整備工事に使用された瓦の大規模な生産基地であったことが明らかとなった。この遺跡の立地する台地の斜面には、多くの瓦窯跡(市坂瓦窯群)が存在することは以前から知られていたが、当地がこれの作業場であったわけである。調査の結果、ここには多くの古墳があったことも新たに分かったが、これらの古墳の周濠の水も瓦生産時に活用されていたことや、大規模な建物が4棟もあって、それらが生瓦を干すためのものであったり、さらに近くに存在する池が、粘土採掘の跡に水が溜ったものであったこと、等々が次々と明らかになった。こうした事実が総合的に確認されること自体、非常に貴重であるが、これに加えて平城京の「還都」と言う歴史上の事実と具体的に結び付く遺跡であったことを確認したことも、大きな反響を呼んだ。

さらにこの年度は、京都府の最北端の弥栄町の遠所古墳群の周辺から、広範囲にわたって製鉄遺跡群を発見した。この一面にある遠所古墳群の調査は、国営農地造成事業に先立って発掘調査を実施してきたが、その際に付近の丘陵に須恵器窯の存在する可能性が指摘されたこともあって、一部試掘調査を実施したところ、須恵器の登窯のほかにも多くの炭窯跡を発見しただけでなく、鉄滓を少なからず採集したことから、本格的な調査を実施し、

これを発見するに至った。調査は翌1990年度にも継続したが、その結果、6世紀後半の製鉄遺構や奈良時代のそれらを確認しただけでなく、日本で最古級の5世紀後半にまで遡りうる製鉄に関する遺構・遺物を発見したことで、関係者だけでなくマスコミ等がこれを大きく取り上げるところとなった。このことから地元の弥栄町では、「製鉄の町」として各種のイベントを計画するなど、研究者や地元の人たちの間には大きな遠所ショックが見られ、さらに将来にまでおよびそうである。

またこの年度、センターでは47か所の遺跡等を発掘調査したが、発見された多くの遺物の中には珍しいものが少なくなかった。その一つに丹波町の塩谷古墳群から出土した巫女形埴輪がある。塩谷古墳群は大小12基の古墳からなり、盟主級の5号墳(6世紀前半)の墳丘裾に転落した状態で、2体の巫女形埴輪が発見された。この内の1体は、非常に保存状態が良く、衣服の状態が明瞭に復原できるものであった。特にヘラで縦方向に線刻した裳をはき、筒袖の衣は左から右へ斜めに羽織った状態が明瞭である。そしてその上に竹管文を施したたすきが表現されている。2体とも同じような姿、形をしているが、この種の埴輪はこれまで京都府内で数例発見されているが、保存状態がこれほど良い例はかつてなかった。

他に、福知山市ヌクモ2号墳から出土した盤龍鏡、綾部市奥大石2号墳出土の蛇行剣も珍しい遺物の例と言えよう。

加悦町教育委員会では、史跡作山古墳群の整備を前提として、作山1・2号墳の発掘調査を実施した。この古墳群は、前方後円墳(4号墳)・方墳(3号墳)・円墳(2号墳)とさらに造り出しのある円墳(1号墳)の4基で構成されているが、この年には先ず1・2号墳の調査が行われた。この内の1号墳は、過去に中心主体が調査されていて、その際に組合式の石棺から鏡等の多くの副葬品が発見されたが、今回は主として墳丘部および墳丘裾部の調査が行われた。その結果、墳丘の裾部には等間隔に配置された埴輪棺等の埋葬施設が数多く設けられていたことが明らかとなった。こうした例は、全国的にみても徐々に数が増えてきているが、これほどまでの典型的な例は珍しく、関係者の注目を集めた。なお、この古墳群の整備は、発掘調査が終了した1・2号墳から順次着手されているが、京都府内ではこうした古墳群等の遺跡の本格的な整備事業は初めてで、付近の自治体はもちろんのこと、全府内的にその成り行きが注目されている。

なお、財団法人向日市埋蔵文化財センターが設立されたのはこの年の4月1日で、京都府内でのこの種の機関は4番目となる。

1990年度は、当センターが設立されて満10年目にあたる。センターは、このことを記念して「京都・古代との出会い」と題して特別展覧会とともに、特別講演会「埋蔵文化財こ

の10年」を催した。前者では、センターが発足した1981年から1990年までの10年の間に、当センターに限らず、京都府教育委員会、市・町教育委員会等の実施した発掘調査によって出土した埋蔵文化財を中心に展示し、この間の調査成果を公開したもので、また後者は、京都府内に限らず、日本全国に視野を広げて、やはり同じ期間に日本の考古学および古代史がいかに変わり、発展したかを中心的なテーマとして、多くの人たちに知っていただくことを目的としたものであった。特に前者については、数多い遺物をテーマごとに分類し、いわゆる「コーナー展示」を中心にし、できる限り分かりやすい展示に心掛けたことが、見学者の好感を呼び、さらに完形品を見学者に直接触れさせ、実物を実感させる「ふれあいコーナー」を設けたことも非常に大きな反響を呼び、盛会の内に閉幕した。

なお、当センターでは本年度中に約41か所の発掘調査を実施する予定であるが、今日現在調査中の八幡市の内里八丁遺跡では、弥生時代後期の水田の跡が確認されている。水田は、小さなものは約13m²のものもあるが、概ね約20~30m²である。さらに各水田内には、夥しい数の稲の株跡が検出されている。現段階では、これらが相互に一定の間隔を有していることから、「田植え」の可能性が非常に高いとすることができるが、このことについては調査の最終結果を待って報告したい。

この他の調査の中では、日吉町の天若遺跡と八木町の八木嶋遺跡の調査に見るべき成果が収められようとしている。これらについては後日報告の予定である。

この年度の恭仁宮跡の発掘調査(京都府教育委員会)では、宮域の南に接する「二条大路」の南・北側溝とともに朱雀大路の両側溝の一部が確認された。この成果は、恭仁宮の南限を確定するのに非常に重要な意味を持つものである。そして同時に「二条大路」の側溝が南と北ではそのレベルが大きく異なっていることも明らかとなったが、このこと自体も、恭仁宮の立地が他の宮と比べて異常であることに起因するもので、恭仁宮の内裏をはじめ、朝堂院や「二条大路」等の位置や規模、その他の基本のことごとくが地勢に制約されていることが、これで改めて確認されたことにもなる。

さらに、園部町教育委員会が調査した園部黒田古墳については、これが発生期の古墳に相当することが明らかとなった時点で、やはり関係者の注目を集める結果となった。これも調査開始当初は、古墳であるか否かは、試掘調査の結果を待たなければならない状況にあったが、結果的には、前方後円形(全長52m)をした「古墳」であったわけで、先の「芝ヶ原古墳」とともに、ここ数年の間に、発生期の「古墳」が京都市内だけでも2例が相次いで発見されたことになる。この種の遺跡が「古墳」であるのか「墳丘墓」であるのか議論の必要はあるが、他の府県でも近い将来にこの種の遺跡が、少なからず発見される可能性を暗示していると言することができる。喜ばしいことに、この遺跡についても関係者の努力

により、現状のまま後世に残されることが決定された。

4 むすびにかえて

当センターが設立されて、はや10年の歳月が流れた。この間、組織の拡大・充実、事務所の移転、重要遺跡の発見・調査、そしてそれらの保存問題等々、この種の機関では必ず経験すると言ってよい多くの局面に遭遇した。また一方、当センターが発足したことで、京都府内の埋蔵文化財の発掘調査の分担が以前にも増して明確になったことも事実である。当センターの設立以後、長岡京市と向日市に、やはり同種の機関が設立されたし、市町村の調査体制も、それまでに比べて格段の進歩をみた。こうした面が多く、そして大規模な発掘調査の実施を可能にしたことで重要な遺跡・遺物の発見、保存を呼び、さらには日本の考古学・古代史の発展に寄与したことは事実である。

京都府に限らず全国どこにあっても、埋蔵文化財の調査の成果は、調査そのものが開発事業に伴うものである以上、全く予想出来るものでないが、実際に遺跡に立ち、それを調査する人、機関などの問題意識の持ち方・対応の仕方によって、調査成果に大きな差が出ることを、10周年を迎えたことを契機に、再び噛み締めたところで、筆を置くこととしたい。

(なかたに・まさはる=当センター)